

# 集落と連携し、景観保全と 「丹後牛の里」を実践する法人経営

一畜産を活かした 地域づくり、人づくり、絆づくり

株式会社いちがお畜産（肉用牛繁殖経営・京都府京丹後市）

## 地域の概要

京丹後市は、京都府最北端、丹後半島に位置し、沿岸部は山陰海岸国立公園、丹後天橋立大江山国定公園に指定され内陸部には標高400～600mの山々が存在する。

株式会社いちがお畜産は、丹後半島唯一の関西百名山である依遅ヶ尾山（いちがおさん）の南麓にあり、農場名の由来にもなっている。気象条件は、年平均気温は15.0℃、最高気温は17.8℃である。春から夏にかけては晴天が広がる一方、冬にかけては、「うらにし」と呼ばれる雨や雪を交えた湿度の高い南西風が発生し吹き荒れ、最深積雪は平均40cmを記録する年もある。

農林水産業では、平成の初めころまでは葉タバコと水稻の産地で、国営農地開発が進め



（写真2）繁殖牛舎及び畜魂碑

られてからは、水稻に加えて野菜、果樹（メロン、ブドウなど）も主要産地であり、良質な漁港を基地とした間人カニ、丹後トリガイといった特産品もある。

畜産では、丹後地域は但馬地域に隣接し、昭和の頃までは京丹後市において子牛市も開催されるなど、和牛の伝統的な産地の一角を占めている。

## 経営・活動の推移

### 【本格的に畜産経営を開始】

昭和55年に現代表の大江良樹氏（以下「良樹氏」。）が大学卒と同時に親元就農し、水稻を中心とする耕種農業とともに地元で開始された丹後地域国営農地開発事業による開発農地（以下、「国営農地」）での営農に参加した。それと同時に肉用繁殖雌牛1頭を導入し、昭和48年頃まで両親が取組んでいた畜産経営を再開した。



（写真1）家族写真（右から良樹氏、従業員の蒲田氏、良樹氏夫人、健人氏夫人、健人氏）

(表1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭（羽）数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和55年	肉用牛繁殖 稻作	成雌牛1頭		・大学を卒業後、22歳で就農 ・繁殖牛を導入し、畜産経営を開始
昭和56年	肉用牛繁殖 稻作	成雌牛10頭	150 a	・国庫事業で牛舎を建設 ・10頭規模に拡大
平成元年	肉用牛繁殖	成雌牛16頭	340 a	・丹後地域国営開発農地にタバコ ・廃作跡地での飼料作物栽培開始
平成5年	肉用牛繁殖	成雌牛18頭	〃	・国庫事業で牛舎を建設 ・20頭規模に拡大
平成10年	肉用牛繁殖	成雌牛24頭	〃	・地域集落内の農地で放牧開始
平成15年	肉用牛繁殖	成雌牛30頭	〃	・農林漁業金融公庫からの借入金で子牛育成牛舎を建設
平成18年	肉用牛繁殖	成雌牛25頭	1000 a	・子供が大学卒業と同時に就農 ・親子による共同経営を開始
平成22年	肉用牛繁殖	成雌牛30頭	〃	・自己資金で牛舎を増設 ・30頭規模に拡大
平成26年	肉用牛繁殖	成雌牛32頭	〃	・国庫事業で牛舎を増設
平成26年	肉用牛繁殖	成雌牛32頭	1200 a	・経営を法人化 ・『株式会社 いちがお畜産』
平成28年	肉用牛繁殖	成雌牛32頭	〃	
平成29年	肉用牛繁殖	成雌牛34頭	〃	・第11回全国和牛能力共進会に出場
令和元年	肉用牛繁殖	成雌牛38頭	〃	
令和4年	肉用牛繁殖	成雌牛42頭	〃	・第12回全国和牛能力共進会に出場

昭和56年に、牛舎を建設し、規模拡大を図るなど、畜産経営への注力を進めていた頃、地域では、国営農地でのタバコ栽培縮小による作物転換が呼び掛けられ、良樹氏の提案により、飼料作物へ切り替えられていった。

これをきっかけに、良樹氏は、畜産経営に重点的に取組むようになり、牛舎建設（平成5年、15年）や血統を重視した繁殖雌牛の導入により、生産性向上を目指した。また、丹

後地域の和牛の伝統を受け継ぎ、多くの人々と連携して和牛を活用した地域づくり「丹後牛の里」を目指す取組みを始めた。

### 経営管理・生産技術の特色

#### 【集落との連携】

いちがお畜産の経営理念の基本は集落との連携である。

その取り組みの一つが、耕作放棄地化が懸念される土地を利用した自給飼料生産であり、良樹氏は一部管理を引き受ける形で稻WCS生産に取組んでいる。

具体的には、移植（田植え）までの作業と水管理は耕種農家が担当し、移植後の栽培管理及び収穫作業は良樹氏が担当している。

もう一つは中山間部の水田を活用した放牧で、積雪期を除き、妊娠確認後から分娩2カ月前までの成雌牛を放牧している。これによ



(写真3) 仲間とつくる「丹後牛の里」

り春から秋にかけては放牧、冬は舎飼いという飼育形態となり牛のストレス回避になってきている。

当初は、これらの取組に対し、一部の耕種農家からは牛ふん堆肥の施用、牛の蹄による水路及び畔の損傷を懸念する声もあった。しかし、良樹氏らの人柄や説明、実践によって集落の景観保全及び水田機能の保持への貢献が認められ、今日では集落全体から高い評価を得られている。

### 【先進技術の導入】

経営規模の拡大に伴い、生産性向上と事故防止のため先進技術も導入している。まず、平成22年に監視カメラの設置をした。これにより、夜間も含めて牛群の監視が可能になり、子牛の事故を未然に防ぐことや育成率の向上につながった。さらに、育成時期に、自給粗飼料を多給することにより、子牛セリ市（令和3年）での成績は、体重が府全体対比95.9%であったのに対し、販売価格は府全体対比100.6%、キロ単価105.0%と高い評価を得ている。

令和2年には、母牛を温度センサーで監視し分娩時期を予測する「牛温恵」を3基導入しており、これにより、受胎率の向上、平均

(表2) 経営実績（令和3年度）

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族・構成員	2.6人
	雇用・従業員	0.4人	
	成雌牛平均飼養頭数	42.5頭	
	飼料生産 実面積	1,100 a	
	年間子牛分娩頭数	44頭	
	年間子牛販売頭数	15頭	
	雌子牛（肥育素牛生体販売）	19頭	
収益性	所得率	30.0%	
	成雌牛1頭当たり生産費用	850,082円	
生産性	成雌牛1頭当たり年間子牛分娩頭数	1.04頭	
	成雌牛1頭当たり年間子牛販売頭数	0.80頭	
	平均分娩間隔	11.8ヵ月	
	雌子牛	販売日齢	296日
		販売体重	279kg
		日齢体重	0.943kg
		1頭当たり販売価格	736,120円
	雄子牛	販売日齢	273日
		販売体重	281kg
		日齢体重	1.029kg
		1頭当たり販売価格	737,637円
粗飼料	成雌牛1頭当たり飼料生産延べ面積	33.3 a	
	肥育牛1頭当たり飼料生産延べ面積	a	
	借入地依存率	96.0%	
	飼料TDN自給率	55.0%	

分娩間隔の短縮につながった。

集落との連携による自給飼料給与、水田放牧に加えて、これらの先進技術導入の集大成として、第10回～第12回と3回連続で全国和牛能力共進会に京都府の代表として出場した。



(写真4) 集落との連携による稲WCSづくり



(写真5) 第12回全国和牛能力共進会鹿児島大会へ出発



(写真6) ゆったり寝ぐ子牛

#### 【近隣畜産農家との連携】

良樹氏は畜産経営開始後、若手のホープとして早くから丹後和牛生産組合の役員として地域のまとめ役を担い、京丹後市を含む丹後地域の畜産農家の相互協力、情報交換に取組んでいる。

更には、子息の健人氏たけひと（以下「健人氏」）は、就農以降、経営内で家畜の人工授精を実施するとともに、JA等の要請に応じて、地域の畜産農家の人工授精も手伝っている。さらに、良樹氏、健人氏親子は、地域の畜産農家が夜間等に分娩介助が必要な際には、農場まで出向き、作業を手伝うなど地域の肉用牛生産の

支えとなっている。

また、府内酪農家とも連携し、和牛の受精卵移植を活用した高能力な子牛の増産にも取組んでいる。

#### 【しっかりとした環境、衛生対策】

家畜排せつ物は、堆肥舎で全て堆肥化し、自給飼料生産に利用している。また、集落内で堆肥の利用を希望する農家にも供給しており、堆肥の需要に応えられない時期もあるほど、多く利用されている。

放牧地においては、適切な頭数で放牧し、また、毎日の観察も欠かさず行っているため、家畜排せつ物にかかる近隣住民からの苦情は

ない。

衛生対策は、平成30年に導入した燐煙消毒器により牛舎内消毒を行っている。また、家畜保健衛生所の助言を基に、母牛、子牛それぞれの疾病予防プログラムを確立し、疾病対策を徹底している。

これらの取組みにより、牛舎は清潔に保たれ、母牛、子牛ともゆったり寛ぐことができている。このことは、飼育管理の省力化にもつながっている。

#### 【高い粗飼料自給率】

現在では、国営農地でのスーダングラス等の栽培、サイレージ利用、転作等による飼料稲の作付け、稲WCS利用（300kg、200個）及び約15haの放牧により、粗飼料自給率はおおむね50%を達成している。

### 地域に対する貢献

#### 【ふるさと共援活動スタート】

平成20年に良樹氏が代表となり集落、立命館大学研究室、学生、都市住民が連携し、ふるさと共援組織が立ち上げられ、集落の活性化、再生を図る活動がスタートした。

具体的には、共援者である立命館大学の学生とともに、依遅ヶ尾山（いちがおさん）の登山道の整備、登山口での植樹（桜20本）、鳥獣被害防止のための柵の設置及び低利用な



(写真7) ふれあい音楽祭～集会所横の広場にて～

竹やぶの手入れなどの活動を通じて、地域資源の活用と景観の保全を図ってきた。

これらの活動により、幅広い人材とのネットワークが形成され、「京丹後矢畠の郷ふれあい音楽祭」が開催されるなど、京丹後市内でのふるさと共援活動の先駆的事例となっている。

#### 【地域づくり協力隊】

当地区をはじめとする市内での共援活動により大学、学生、都市住民との交流が広がり、移住して京丹後市を応援したいとの声が寄せられたため、平成22年に京丹後市地域おこし協力隊制度が創設された。

現在も市内各地で地域おこし協力隊員が活動しており、当地区においても地域協力隊との交流が続けられている。

#### 【住民等との連携】

近年、一部、自家産牛の肥育に取組み、生産した牛肉を京丹後市ふるさと納税の返礼品や地元住民への謝礼として提供し、京丹後市及び地元振興に全面協力している。

また、良樹氏は、狩猟免許を取得し、主にシカを対象に獣害防除に取組み、地元の農作物の被害防止にも尽力している。

### 女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取組み

#### 【女性の活躍】

いちがお畜産では、良樹氏、健人氏それぞれの夫人及び地元出身の女性従業員が経営に参加している。

子牛セリ市には、両夫妻、女性従業員を連れだって子牛市出場に臨み、他の生産者等との交流や研鑽に努めている。

また、女性従業員は、京丹後市の自然・産業を案内する観光ガイドでもあり、いちがお畜産での経験を活かしている。

このように、いちがお畜産では、働きがい、



(写真8) 地元への感謝

生きがい、学びがいのある職場環境の整備に努めている。

#### 【働きやすい職場づくりの取組み】

経営への従事においては概ね分業制を執っており、良樹氏は主に対外的な用務、自給飼料生産及び放牧を、健人氏は、主に肉用牛の飼養や繁殖の管理を担っている。また、両夫人、女性従業員は他に仕事や育児を担っていることから、限られた時間帯で子牛の哺乳、朝の飼料給与、牛舎内の清掃及び消毒等の細やかな目配りや観察が必要な軽作業等にそれぞれのペースで従事し、お互いに他の用務等ある場合にはそれぞれで補完し合うことで、無理なく経営に参画できている。

## 将来の方向性

### 【今後の経営計画】

現在、20頭程度の規模拡大を目指し、新たに牛舎を建築している。

引き続き、肉用牛繁殖農場として集落を守ってゆくとともに、今後は、直接の購買者である肥育農家や消費者が気軽に農場に来場できる環境を整備し、子牛の品定めや意見交換等ができる場を提供することで、京都府の畜産振興に貢献したいと考えている。

### 【次世代への継承】

現在、健人氏と良樹氏が協力して経営しているが、健人氏の技術向上に合わせて経営委譲を進めつつある。

その第1歩として、平成26年に今までの経営改善の成果を活かし、一層の経営管理の徹底、さらには健人氏への経営委譲のため法人化を行った。

今年度の牛舎等の建築も、経営移譲を見据えたものであり、今後とも家族で相談しながらスムーズに経営継承を進めるとともに、健人氏の世代でも地域で仲間と集い、ともに地域を守りながら持続的な経営を担ってもらいたいと考えている。